

1. 授業の概要と地域社会を意識した工夫

本授業は小学校・中学校教員免許必修科目である。中等教育コースの学生（2回生以上）を対象にした授業であり、大学院生も含めて、受講生は55名であった。

道徳教育の制度的な位置づけや教育内容の理解だけでなく、指導法まで学習してもらう。前半では、道徳教育の学習指導要領上の位置づけや歴史の変遷、諸外国との違いについて講義した。後半では、実地指導講師として愛媛県内の学校教員等を招き、地域の教育実践に根差した道徳教育の取り組みについて講義してもらった。そのうえで、道徳教育に関する理論や方法の紹介をふまえて学習指導案を書くとともに、模擬授業を行ってもらった。

本年度は、模擬授業を取り入れるとともに、道徳の評価について愛媛県教育委員会が作成した「道徳の教科に関する指導資料」（平成30年3月）を活用した。

2. 地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

愛媛県教育委員会作成の「道徳の教科に関する指導資料」は、道徳教育が「特別の教科道徳」として実施されるにあたり、愛媛県内の小・中学校教諭の事例を中心に、具体的な評価方法を示したものである。教科化に伴って、授業評価とともに児童生徒の学習を見取る評価をどのように行うかが大きな課題となっている。本資料は、そうした課題を克服すべく、小学校低中高学年、中学校段階それぞれに、具体的な教材を扱った指導案、指導上の工夫、評価の工夫が掲載されている。実習経験のない学生にとって、実際の教員が行っている指導案づくりや授業での児童生徒の見取り、板書やワークシートの工夫を知る機会は極めて有効だと考えた。

本資料は、愛媛県道徳教育推進支援委員会にて繋がりのあった指導主事にご協力いただいで活用させてもらった。執筆者の中には、附属小学校や県内の道徳に関する研究会で知り合った教員もおり、実際に拝見させていただいた授業実践や評価の工夫もあった。道徳の授業づくりに関する地域の教員との共同研

究の成果が、大学での指導に活かされたと言えよう。

なお、本年度から教職大学院の小田哲志先生を中心として、道徳内容研究会を松山市教育研修センターにて開催している。大学連携セミナーとして実施している同取組では、各回で扱われる内容項目について、学校教員と大学教員が互いの実践経験と理論を突き合わせ、理解を深めている。そうした取組も随時、大学での指導に活かされたことを付言しておきたい。

今年度の「道徳教育指導論」では、模擬授業を取り入れた。教材として「二通の手紙」（『私たちの道徳』）と「正義って何？」（東京書籍）を取り上げ、それぞれについてグループで模擬授業を行い、ピアレビューにて互いの授業を評価し合った。模擬授業を受けて、各学生には指導案を書くことが求められた。昨年度は指導案を書くだけで終わっていたが、今年度は模擬授業を取り入れることで、より洗練された指導案が提出された。

「道徳の教科に関する指導資料」は、この模擬授業・指導案作成の発展として活用された。具体的には、同資料の中から、「二通の手紙」ならびに、同じ内容項目（「遵法精神、規則の尊重」）を扱う小学校の教材「雨のバスの停留所で」に該当する箇所を抜粋し、学生に配布した。学生は「二通の手紙」の模擬授業・指導案作成を経たうえで、当該資料を読むことになる。当該資料は道徳教育の評価を扱う回に配布するため、学生の主要な目的は道徳評価に関する原則や評価方法を学ぶことである。しかし、先述したように、同資料には単に評価の工夫が述べられているだけでなく、指導案や指導上の工夫も併記されている。そのため、学生は自身が作成・実施した指導案や模擬授業と照らし合わせながら、評価の工夫を読むことができる。実際、学生の感想の中には、自身が作成した指導案との違いに触れたり、指導と評価が一体であることへの驚きが述べられたりしている。例えば、「雨のバスの停留所へ」を扱った工夫では、児童の授業中の発言を教師が分類しながらメモし、構造的に板書することで、授業が効果的に展開

されていることが記されている。学生はこの工夫を読み、どのような観点で児童を評価するかを明確にしておくことが、教師にとって評価しやすくなるだけでなく、授業が構造的に展開されることで児童にとっても有益となることに気づく。また、「二通の手紙」を扱った工夫では、評価の観点を明確にする中で取り入れられたマトリックス表が、生徒の思考を可視化・整理することで、より深い価値理解へと繋がるということが記されている。学生はこの工夫を読むことで、模擬授業・指導案作成では考えつかなかった教材分析の視点に気づくことができる。さらに、そこでは授業終末に記入するワークシートにおいて、学習の成果を生徒自身がベクトルで表すという工夫が描かれている。ベクトルで表すことで、生徒は言葉以外の感情的な変化をかたちにすることができる。学生はこの工夫を読むことで、生徒に自己評価させることの意義を理解するとともに、多様な表現機会の保障が多層的な学習成果の見取りに繋がることに気づいた。

以上のように、地域で活躍する学校教員の具体的な工夫を目にすることは、教育実習を控える受講生にとって有益だったと思われる。「道徳の教科に関する指導資料」やそこに記されている工夫は、研究者である私だけの力では提供できない内容である。附属小学校や愛媛県内の道徳教育に関する共同研究を通じて、そうした内容を取り入れた「道徳教育指導論」の構想が可能になった。今年度はその利点を活かして、模擬授業・指導案作成と連動させて授業を行った。ただ、模擬授業を取り入れた結果、時間の制約ができてしまい、評価を扱う回が最後となって、学生が学校教員の工夫を踏まえて考える機会を設けることができなかった。昨年度までは、学校教員の授業記録をもとに、疑似的に授業検討会を行ってもらっていた。来年度は、評価の回後に模擬授業検討会を行うことで、学校教員の工夫を踏まえて学生が自身の工夫を考案する機会を保障したい。

3. DP 対応調査の結果分析

本授業の DP 対応調査について、31 名の回答から、結果を分析しておきたい。

まず、本授業で挙げている DP の「知識・理解：教育と教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している」

と「技能：教育活動に取り組むための十分な技能を身につけている」について、どちらも「とてもそう思う」「ある程度そう思う」と回答した学生が 9 割前後いたことから、ねらいはある程度達成できていたことがわかる。その他の「思考・判断・表現」「興味・関心・意欲、態度」についても 9 割以上の学生が肯定的な回答をしていた。

次に、自由記述で回答する「この授業を通して、教員になる上で、どのようなスキルが身につくと思いますか」という設問では、多くの学生が道徳授業の仕方やスキルを挙げている。今年度は模擬授業を取り入れたり、実地指導講師の授業について Moodle 上で学んだことを記述させる反省の時間を入れたりしたことから、知識・理解よりも、技能面で学習できたという実感が多かったように思う。来年度、精確に検証してみたい。

授業時間外の一週間あたりの学習時間の回答を見ると、平均で 1 時間を超えていた。授業時間外の学習時間は昨年度までの課題であったため、改善できたと思われる。要因として、模擬授業の準備時間や実施指導講師の授業感想を Moodle 上で入力する時間が増えたことが挙げられる。だが、時間数が増えたからといって、学習の質が高まったとは言えない。課題以外で授業時間外に予復習の学習に取り組んだ学生は、31 名の回答のうち 15 名であり、そのほとんどは一週間に 1 時間程度であった。この結果は授業者にとっては意外であり、どのような内容に取り組んだのかについて、来年度詳しく調べてみたい。

他方で、自発的に読んだ本や論文の数、あるいは授業をきっかけに教育実践や授業時間外の制作等に取り組んだ学生は多くはない。Moodle で授業のまとめを掲載する際に参考文献を記載したり、参考になる URL 等を示したりするなど、学生が読んでみたい、参照してみたいと思えるような環境を整備する必要があるだろう。また、授業を受けて学生が自発的に教育実践へと関心を向けられるよう、例えば附属学校園の研究大会への参加を促すことも有効かもしれない。そのためには、附属小学校との共同研究の充実だけでなく、附属中学校での道徳授業についても共同して取り組んでいくことが必要になる。来年度の課題としておきたい。